恋する乙女の奮戦記！～真剣で恋したのは筋肉？～

風

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
恋する乙女の奮戦記！～真剣で恋したのは筋肉？～

【Ｎコード】
Ｎ７８０７Ｘ

【作者名】
風

【あらすじ】
『女の子を救い悪漢から救われた！？　そこから生まれる恋があってもいいじゃない！』
笑って泣いて時にケンカして、目指すのはなかなか振り向いてくれないアノ人と結ばれること。乙女回路１００％な主人公と周囲の人間が繰り広げるラブコメディ！
いつになったら彼女と彼は結ばれるのか！？

初恋なの！？（前書き）

前々から書きたかった

初恋なの！？

その日は珍しく体調が優れない日だった。

中学校に入学してから、ただの一度も体調を崩した事がない。
周囲で風邪が流行った時も私はなんともなく、そんな私を見て友達は「やっぱり馬鹿は風邪にならないってホントだったんだねー」とか言って茶化したりしていた事もあった。

だからなのか、いつ振りなのかもわからない熱で頭もボーっとしていた。
今年から受験生という事もあり気合いで学校での一日を過ごした私は、帰り道にある小さな病院に立ち寄り診察をしてもらうことにした。

病院で診察を受けている間に仲の良い友達から心配のメールが届いており、短く「大丈夫、ただの風邪」とだけ返信する。
携帯と処方された風邪薬を鞄にしまうと、長くはないが今の体調を考えると少ししんどい道のりの事を怠く感じながら、重い足取りで病院をあとにした。

家へと帰っていた私は、とある光景が目についた。それは同じ中学の女の子がナンパをされているというものだった。
ただそれだけだと何も気にならない……べ、別にナンパされている事に羨ましいとか思ってないから！

……話を戻すけど、明らかに女の子は嫌がっていた。それを強引に引き止める悪質なナンパ男。

明日は高校へと伝わる成績の最後のテストだというのに運悪く風邪を引いてしまった私がしなければならないのは、早く帰宅ししっかりと休養すること。

わかっている。わかっていたけど……

気付く私は、最悪な体調のせいで重い体に鞭を打つように走り出していた。向かう先は困っている女の子とナンパ野郎のもと。

目の前で困っている人を放っておくなんてできなかった。

たどり着いた私は走っていた勢いそのままにナンパ男の後頭部目掛け鞄をぶつける。突然襲った衝撃と痛みでナンパ男は女の子から掴んでいた手を離すと、後頭部を抑えその場に倒れた。

「えっと……その……」

女の子は倒れている男と私を交互に見て少し困惑しているようだった。

しばらくすると自分が助けられた事を理解した様子で

「ありがとうございましたッ」

そう言って女の子は力いっぱい頭を下げた。

「いいよいいよ。それより早く帰ったほうがいいよ？」

「は、はい！」

返事をした女の子はもう一度頭を下げお礼を言うと、パタパタと駆け足で帰っていき、私はそれを笑顔で見送った。

「さて」

「さて……じゃねぇ」

忘れていた。

「いきなり後ろから襲ってくるなんて、いい度胸してるじゃねーか」

後ろを振り返るとさっきまで地面に倒れていたナンパ男が立ち上がって、怒りの形相を浮かべて私を見ていた。

「女には逃げられちまうし、頭は痛てぇし……どうしてくれんだ、あァん？」

「アンタが悪いんでしょ？」

怖かった。足は震えていたと思う。精一杯強がった。

「なん……だと……？」

「何度でも言ってあげる。嫌がる女の子を無理矢理ナンパしてたアンタが悪いの」

私の言葉を聞いてナンパ男の顔が見る見るそれまで以上に怒り一色に染まっていく。

でも止められなかった。もし止めてしまえば、恐怖のあまり泣いてしまうから……だから止められない。

助けて……

心の中で叫んだ。

「それに――」

誰か助けてよ……

お願いだから

「――――！」

何を言っていたか覚えていない。ただ覚えているのは、必死に強がりながら助けを求めていたこと、それと怖いという感情。

「テ、テメェ！」

男の怒りが爆発した。さっき男が言った通りナンパは失敗し、さらに年下の小娘から罵倒されいるのだ。おそらく罵倒してなかっても怒りを納める為の矛先は失敗させた張本人の私に向いていただろう。ただそれが早まっただけ……。

男は大きく腕を振りかぶるとコッチに向かってくる。

「……っ！」

そこから先はわからない。これから来るであろう暴力が怖くて目を閉じてしまったから。男を罵倒していた口からは声が失われていた。

「……あれ？」

一向に訪れない衝撃と痛み。不思議に思った私は恐る恐る閉じていた目を見開いた。

そこにあったのは

「ががっ……何しやがるッ！」

「何しやがるだって？」

私を殴ろうとしていた男の顔を手で覆い体ごと持ち上げている男の人の背中。

「女には優しくしろって習わなかったのかコノ野郎！」

私より背の高いナンパ男と比べてさらに身長のある男の人は、アイアンクローをしていたナンパ男を軽々と投げ飛ばした。
投げられた男は地面から立ち上がると、勝てないと判断したのか逃げ出して行ってしまう。

「逃げられちまったな……それより大丈夫か？」

逃げて行ったナンパ男を見ていた男の人は、私の方へと向き心配の声をかけてくれた。

「大丈、夫……」

そこで私は意識を失ってしまった。恐怖から救われた安堵感と風邪による体調不良が原因だった。

目を覚ましたのは翌日。見知った私の部屋の中で寝ていた私は両親に何で自分が家に居るのかと尋ねたら「学校から連絡があって迎えに行った」と答てが返ってきた。

頭の中には助けてくれた男の人のことだけがグルグルと回っていたが顔は思い出せない。

だって見ていなかったのだから……夕日を背にしていた男の人。覚えているのは男らしい大きな背中、そして「大丈夫か？」と言ってくれた優しい声。

今日は大事を取って休むと学校に両親が連絡したと言っていたが、私は制服に着替えると寝癖を直さず家を飛び出していた。

学校に行けばわかるはず！

そう思ったから。

息切れを起こしながらも学校に着いた私は、驚く先生に詰め寄り

昨日のことを訪ねる。

「わかった！　わかったから落ち着け」

先生は困ったな、というような顔をしながら私に落ち着くように促してきた。

「昨日気を失っているお前を男の子が運んで来たんだよ。熱が出てるって。家に運ぼうとしたけど場所はわからない、だから着ている制服の学校へと運んで来てくれたそうだ」

そうだったんだ……

「な、名前はっ？」

「先生もお礼を言いたくて聞いたんだけどな『そんなことのためにやったんじゃないからいい』と言って教えてもらえなかったよ」

「そんな……」

最後の頼みの糸が途切れたことに落ち込んでしまう私

「ただ……その男の子は川神学園の生徒だと思うぞ？」

「え？　なんでわかるのっ？　ねぇ！　ねぇッ！」

「だから落ち着けって。川神学園の制服を着ていたからだ。これで満足か？」

……川神学園

……川神学園の制服

その二つの言葉が私の頭を飛び交う。

「決めた！」

さっきから落ち込んだり興奮したりと忙しい私が突然元気な声を上げたことに驚きながら先生は聞いてくる。

「決めたって何をだ？」

「私、川神学園へ行くッ！」

「なっ……お前、推薦で行く所決まってただろ！？」

「知らないわ。誰が何を言おうと私は川神学園に行くって決めたん

だから！」

今思えばコレが初恋だった。

――時は流れ２００９年、春

あの後、両親から怒られたり、行く予定だった学校に謝ったりと色々あったけど私は川神学園の校門の前に立っていた。

初恋なの！？（後書き）

過去語りな感じだったので、どうしても文章がブツ切りになってしまいました　ｏｒｚ
今後は三人称と一人称がゴッチャになる可能性がありますが、ご了承ください！

この作品を書くにあたりアドバイスをくれた方々、読んでくださった方々に最大の感謝を……！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7807x/

恋する乙女の奮戦記！～真剣で恋したのは筋肉？～

2011年10月21日02時06分発行